

ここにいま

平成29年度西朝明中学校
学校通信 第7号
平成29年9月14日

本年度の全国学力学習状況調査の結果に基づいて、本校の分析を行いましたので、お知らせします。国語も数学もAは主として知識、Bは主として活用とされています。なお併せて、NRT（CRT）についてもお知らせします。NRT（CRT）の英語は2年生のみが対象です。

全国学力学習状況調査

国語A 領域別に見てみると、4領域のうち「書くこと」と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」はやや強く、「話すこと・聞くこと」と「読むこと」はやや弱いという結果でした。要因としては生徒たちが、スピーチや文章の構成を問う問題に取り組む機会が少なかったのではないかと思います。また、読むことに関する項目の要旨や構成、表現の仕方を問う問題の正答率に低い傾向があったため、授業や毎日の学習のなかでも問題に取り組む機会を増やしていきたいと考えます。また、漢字、慣用句の反復練習や、文章を書く機会を継続的に設けながら、さらなる向上を図る必要があると思います。

国語B 国語Aと同じく「話すこと・聞くこと」はやや弱いものの、その他の3領域はやや強いという結果でした。

全体的に見てみると、資料を活用して話す、論理的な構成に注意して聞く、必要な情報を読み取る、といった問題に弱い傾向が見られたため、授業のなかでこれらの問題に取り組む機会を設ける必要があると言えます。

また、問題形式別では、短答式は強いものの、選択式は弱いという傾向を示しました。

数学A 「数と式」、「図形」、「関数」「資料の活用」のすべての分野においてやや強いという結果でした。ただし、「資料の活用」における確率に関する問いでは正答率が低く、無回答率も高いという結果でした。

また、標準偏差が大きく、これは得点のちらばりが大きいことを表しています。一方で、得点の中央値が高いことを考え併せると、基本的な学力に大きく差があり、技能・知識が定着している生徒が多いことが分かると同時に、低学力生徒への指導がより一層重要になっていると言えます。日々の学習で基本的な内容の理解に努め、反復練習で習得していくことが重要になると言えます。

数学B 上述の4領域のうち、「関数」でやや強みを見せたものの、他の3領域では弱いという結果でした。Aと同じく標準偏差は高く、また無回答率も高いようです。

問題形式による正答率の差もあるでしょうが、問題文や資料を読み取ることができるかどうかで正答率や無回答率が変わっているようです。文章を読み取る力、あきらめない粘り強さなどを育成していく必要があると思われます。

NRT (CRT)

国語 「文や文節、単語についての理解」はかなり強いと言えます。弱いと思われるのは「話し手の意図を聞くこと」や「語句や表現技法についての理解」、「文学的な文章を読むこと」、「漢字を正しく覚えて使うこと」などがあげられます。特に2年生では、「読むこと」の領域が弱いことがわかります。

さらに小問別で見たときは、まとめや要点の読み取りや考察について無答率が上がっています。これは普段の授業の様子からも苦手としている生徒が多くいることから、あきらめてしまった生徒もいたと考えられます。一方、「要点をまとめる」の通過率は高く、取り組むことができる生徒はまとめる力がついてきていると考えられます。「話し方に関する意見」は取り組む生徒が多いものの結果としてはやや弱く、普段の発表の時などから良い話し方について考え、実践する機会を確保していかなければならないと考えます。「漢字の書き」や「表現技法」の理解についてもやや弱いのですが、無回答率が高いわけではないので、正しい理解ができていないため間違っているのではないかと判断します。この点に関しては、日常的に漢字を書いたり、表現技法を使う等の機会を設けて強化していかなければならないと思います。全体的には、粘り強く問題に取り組もうという姿勢はあると言えます。

数学 弱みと考えなくてはならないものはないと言えます。しかし、強いて言えば若干、図形分野が弱点かもしれません。例えば、1年生の「立体図形」と「起こり得る場合」「場合の数・2桁の偶数」や2年生の「平面図形」がやや弱い傾向があるからです。

1年生の「台形の求積の応用」、「三角形の求積の応用」で極端に無答率や誤答率が上がり、2年生では「二等辺三角形の性質」で誤答率が高いことがわかります。無答率が多かったのは、1年生では最終問題のみ、2年生では「正負の数の活用・説明」と「比例の利用・説明」の2問だけで、時間が足らなかったり、見直す時間がなかったりというように判断しています。それほど、最後まで粘り強く問題に取り組もうとする姿が見られると考えています。必要な学力は身につけていると言えますが、「数学的な見方や考え方」の観点については強化していく必要を感じます。



英語 領域別ではバランスがよいと言えます。特に弱いという指摘箇所はなく、強いてあげるなら、表現領域の「書く」「話す」がやや弱いと言えるかもしれません。

観点別では、4観点のうち「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「言語や文化についての知識・理解」において、やや弱いと言えます。放送による問題や理解にかかわる問題の「有意差検定」は比較的強く、英語が得意な生徒も苦手な生徒も内容理解力は高いと思われますが、小問の「有意差検定」で弱かったのが、「語形変化・進行形」「語形変化・三単現」「適語選択・誘い」でした。動詞の語形変化を苦手とする生徒が多いことがわかります。表現するために欠かせない単語力、動詞の変化などの基礎的な知識の定着を企図していく必要を感じます。